

第三十五回 齋藤茂吉短歌文学賞

玉井 清弘 『山水』

短歌研究社

選考委員

委員長 三枝 昂之

委員 小池 光

小島ゆかり

永田 和宏

【贈呈式】

令和六年五月十九日（日）

（五十音順）

玉井 清弘 『山水』

(自選)

働ける人らの服になじむ藍阿波の風土をふかくたたえて

国をすて四国をめぐる老い遍路しばらく共に並びて歩く

なにせんと生れしこの世なにもせず待ちている間に桜咲き満つ

西へ西へ歩みてゆかばおのれへと還りゆくべし伊予路へつづく

明けの空澄み渡りたりオリオン座を見あげ歩くも今年で終わり

六十代とつぷりつかる遍路とは己に向き合い己をただす

わかれんとこの世に出会う家族なる絆の重し一炊の世に

あなたはね伊予の人だよ伊予に来て伊予の人らに混じり語れば

山したたる季語に祝われ誕生日 残生ふかき歌をのこせよ

緋めだかもついに二匹となりはてぬつねに寄り添う二つ見ており

●選考委員による選評

玉井清弘氏の歌業をよろこぶ

三枝 昂之

感想小言

小池 光

今回の『山水』は年齢的な蓄積が詩的味わいを深めた世界として学ぶべき点が多い。

道問えば作業をとめてそこまでと別れ道まで送りくれたり

手を止めてそこまでと言いながら分かれ道まで導く。懇ろな反応に遍路を支える文化の深さが表れ、淡々と述べるからそれが詩の味わいとなる。

風草は道のほとりにすいと伸び車の来れば身ぐるみなびく

なにげない風景描写だが、そこから人の暮らしの気配も広がる。詠うことに計らいのない自然体の深さを思わせる。

人生に寄り添う短歌の特徴を一步豊かにする成果が齋藤茂吉短歌文学賞に加わったことを喜びたい。

『山水』は著者十冊目の歌集で八十歳前後の日常が淡々と歌われている。テーマはおのずから「老い」になるが、「老い」とはいささかも観念的なそれではなく、極めてリアルに、小さな日々の不如意の積み重ねであることがよくわかる。きのうまで出来たことが今日出来なくなる。そういう現場に立ち会い、不自由を感じ、嘆き、しかしまだ残されているものを大切に一日一日を生きてゆくことが、歌集を読んでゆくうちに身に沁みて伝わってくる。そういう歌集で、地味だけれど、どっしりとした現実感があって、まぎれなく今年度の収穫であった。

ときにあえかなユーモアを感じさせる歌もある。「老い」を歌うときこのことは大事な要素で、わたしは歌集を読みつつ何度か頬が緩むのを感じた。

淡々と深く、おもしろく

小島 ゆかり

歌集『山水』に寄せて

永田 和宏

風草は道のほとりにすいと伸び車の来れば身ぐる
みなびく

迷いたる子狸ひとつ電話にてよばれし警官とり
かこみおり

冬越えしめだか三匹生き残り二対一にて餌を争う
風草を淡々と描写した一首目。地域のある日の場面
を簡潔に伝えた二首目。冬を越えたためだかの様子を事
実どおりに捉えた三首目。なんの銜いもない、一見地
味な作品ながら、どうにも心に残ります。それは「身
ぐるみなびく」という眼差しの深さであり、「とりか
こみおり」とだけ表現するおもしろさであり、そして、
「二対一にて餌を争う」ところまで存在の姿を見つめ
る力だと思えます。

おめでとうございます。

玉井清弘と言うと、まず四国八十八か所遍路に思
は直結するが、すでに三度の歩き遍路を結願し、四度
目を歩いているという。これまでも遍路の歌は多く詠
まれてきたが、今回の歌集『山水』では、遍路を詠む
というよりは、遍路が自らの生活の一部の景であるか
のような歌のたたずまいが印象的だ。

道問えば作業をとめてそこまでと別れ道まで
送りくれたり

こんな人との出会いが、歩くという行為の原点にあ
るのだろう。思いもかけない人との出会い、それは

西へ西へ歩みてゆかばおのれへと還りゆくべし伊
予路へつづく

とも詠まれるように、まだ見ぬ己れを求めての歩きな
のかもしれない。そんな歩きから自ずと身についたも
のが

風草は道のほとりにすいと伸び車の来れば身ぐる
みなびく

でもあろうか。遍路に限らず、歌集全体にある種の捕
われのない自在さ、構えない視線が印象的な一巻である。

受賞のことば

玉井 清弘

東北の地を訪れたいという念願を若い頃より持ち続けていたが、実現したのは六十代を過ぎてからだだった。北上市、秋田市、青森市での仕事の前後を利用して計画的に見残した東北をめぐる。それまでの私の出会った北限の地は関東地方、山形県は未踏の地としてぽっかり穴があいていた。今回の受賞で「アララギ」の代表的歌人齋藤茂吉の生誕地に立つことができるという喜びは大きい。

「最上川逆白波のたつまでにふぶくゆふべとなりけるかも」、齋藤茂吉の代表作を国語の教師として教えてきた。時々「逆白波のたつまでに」は、見たことのない最上川の景色をともなつて目前に浮かびあがることがある。

沈黙のまま一人で逆白波を見つめる茂吉。逆白波の景の背後に、経てきた人生をかみしめていた茂吉の日々が浮き上がってくる。簡潔な景に情が添った表現の一首。短詩型の持つ力によるのだろう。

選んでくださった選考委員の方々ありがとうございました。



第35回 齋藤茂吉短歌文学賞受賞者歴

玉井 清弘 (たまい きよひろ)

歌人。1940年（昭和15年）愛媛県生まれ 香川県在住 83歳。
短歌誌「音」編集運営委員、元香川県立高等学校教諭。
四国新聞歌壇選者、愛媛新聞歌壇選者、朝日新聞四国版歌壇選者。

【主な著作等】

歌 集：昭和51年『久露』、昭和61年『風箏』、平成5年『麴塵』、
平成7年『現代短歌文庫 玉井清弘歌集』、平成10年『清漣』、
平成13年『六白』、平成16年『谷風』、平成19年『天籟』、
平成25年『屋嶋』、平成30年『谿泉』、令和5年『山水』
著 書：平成5年『鑑賞・現代短歌 上田三四二』、
平成19年『時計回りの遊行 歌人のゆく四国遍路』
受賞歴：昭和62年 第37回芸術選奨文部大臣新人賞、
平成11年 第26回日本歌人クラブ賞、
平成14年 第2回山本健吉文学賞・第2回短歌四季大賞、
平成18年 香川県文化功労者表彰、
平成26年 第29回詩歌文学館賞・第48回迢空賞・
文化庁地域文化功労者表彰
平成28年 第56回四国新聞文化賞

これまでの受賞者

- 第一回 岡井 隆
- 第二回 本林 勝夫
- 第三回 塚本 邦雄
- 第四回 前 登志夫
- 第五回 斎藤 史
- 第六回 近藤 芳美
- 第七回 小暮 政次
- 第八回 馬場あき子
- 第九回 吉田 漱
- 第十回 佐佐木幸綱
- 第十一回 伊藤 博
- 第十二回 森岡 貞香
- 第十三回 竹山 広
- 第十四回 藤岡 武雄
- 第十五回 清水 房雄
- 第十六回 小池 光
- 第十七回 三枝 昂之
- 第十八回 花山多佳子
- 第十九回 永田 和宏
- 第二十回 河野 裕子
- 第二十一回 伊藤 一彦
- 第二十二回 品田 悦一
- 第二十三回 篠 弘
- 第二十四回 秋葉 四郎
- 第二十五回 栗木 京子
- 第二十六回 小島ゆかり
- 第二十七回 柏崎 驍二
- 第二十八回 橋本 喜典
- 第二十九回 大辻 隆弘
- 第三十回 春日真木子
- 第三十一回 吉川 宏志
- 第三十二回 大島 史洋
- 第三十三回 岡野 弘彦
- 第三十四回 佐藤 通雅

- 『親和力』 砂子屋書房
- 『齋藤茂吉の研究―その生と表現―』 桜楓社
- 『黄金律』 花曜社
- 『鳥獣蟲魚』 小澤書店
- 『秋天瑠璃』 不識書院
- 『希求』 砂子屋書房
- 『暫紅新集』 短歌新聞社
- 『飛種』 短歌研究社
- 『白き山 全注釈』 短歌新聞社
- 『呑牛』 本阿弥書店
- 『萬葉集釋注』 集英社
- 『夏至』 砂子屋書房
- 『竹山広全歌集』 雁書館・ながらみ書房
- 『書簡にみる齋藤茂吉』 短歌新聞社
- 『獨孤意尚吟』 不識書院
- 『滴滴集』 短歌研究社
- 『昭和短歌の精神史』 本阿弥書店
- 『木香薔薇』 砂子屋書房
- 『後の日々』 角川書店
- 『母系』 青磁社
- 『月の夜声』 本阿弥書店
- 『齋藤茂吉―あかあかと一本の道とほりたり―』 ミネルヴァ書房
- 『残すべき歌論―二十世紀の短歌論―』 角川書店
- 『茂吉幻の歌集『萬軍』―戦争と齋藤茂吉―』 岩波書店
- 『水仙の章』 砂子屋書房
- 『泥と青葉』 青磁社
- 『北窓集』 短歌研究社
- 『行きて帰る』 短歌研究社
- 『景德鎮』 砂子屋書房
- 『何の扉か』 角川文化振興財団
- 『石蓮花』 書肆侃侃房
- 『どんぐり』 現代短歌社
- 『岡野弘彦全歌集』 青磁社
- 『岸边』 角川文化振興財団

齋藤茂吉短歌文学賞運営委員会事務局

〒九九〇―八五七〇 山形市松波二丁目八一―
 山形県観光文化スポーツ部県民文化芸術振興課内
 TEL・〇三三―六三〇―一三三〇六